

# 中・四国の体育

平成28年度 第45号



## 「わたしはこのように授業をしました!」

中・四国小学校体育連盟編集

～「わたしたちの体育」・「表現運動CD」の効果的な活用法～



- ★1年生 水遊び  
「みんなで たのしい みずあそび」(香川県)
- ★1年生 体づくり運動(多様な動きをつくる運動遊び)  
「めざせ! 本川スーパーマン」(広島県)
- ★4年生 走・跳の運動  
「小型ハードル走」(高知県)
- ★4年生 器械運動  
「もっと美しく! 跳び箱運動」(岡山県)
- ★5年生 器械運動  
「回転する動きのおもしろさを感じよう!」(徳島県)
- ★6年生 陸上運動  
「ハードル走」(愛媛県)
- ★表現運動CD 表現リズム遊び(2年生)  
「なりきり生きものランド!!」(山口県)

中・四国の体育 第45号

巻頭言 生涯スポーツ時代の革新課題「多様化と深化」と中・四国小学校体育連盟の課題  
 中・四国小学校体育連盟最高顧問 成田十次郎…………… 1

第54回 中・四国小学校体育研究大会（島根大会）報告 …………… 2

「わたしはこのように授業をしました！」  
 ～『わたしたちの体育』・『表現運動CD』の活用実践例集～

〈1年〉 香川県 友達と共に楽しみ、高め合う体育の授業実践  
 水遊び「みんなで たのしい みずあそび  
 ～ともだちの いいところを みつけよう～」  
 香川県坂出市立川津小学校 教諭 田岡 秀雄…………… 8

〈1年〉 広島県 友達とかかわり合いながら楽しく運動できる体育科の授業実践  
 体づくり運動（多様な動きをつくる運動遊び）「めざせ！本川スーパーマン」  
 広島県広島市立本川小学校 教諭 龍野 仁美……………10

〈4年〉 高知県 かかわり合い高め合う体育学習  
 走・跳の運動「小型ハードル走」  
 高知県高知市立秦小学校 教諭 石川 悠……………12

〈4年〉 岡山県 友達と協力し、楽しみながら技を高める子どもを目指して  
 器械運動「もっと美しく！跳び箱運動」  
 岡山県岡山市立妹尾小学校 教諭 吉田 明生……………14

〈5年〉 徳島県 「子どもが夢中になる」授業を目指して  
 器械運動「回転する動きのおもしろさを感じよう！」  
 徳島県徳島市福島小学校 教諭 齊藤 貴則……………16

〈6年〉 愛媛県 『わたしたちの体育』を活用した「ハードル走」の実践  
 陸上運動「ハードル走」  
 愛媛県西条市立玉津小学校 教諭 河野 寛詔……………18

〈表現運動CD〉 山口県 なりきって踊る楽しさを膨らませる体育学習を目指して  
 2年 表現リズム遊び「なりきり生きものランド!!」  
 山口県山口市立仁保小学校 教諭 上田 雅純……………20

第55回 中・四国小学校体育研究大会（香川大会）予備案内……………22

各県研究主題と主な研究会・研修会（2016年度）……………24

機関誌『中・四国の体育』のあゆみと編集後記



## 生涯スポーツ時代の革新課題「多様化と深化」と 中・四国小学校体育連盟の課題

中・四国小学校体育連盟最高顧問 成田 十次郎

### 本格的生涯スポーツ時代に直面して

明治に始まるわが国の近代体育・スポーツは、1964年の東京オリンピック前までは、ほぼ学校体育・競技スポーツ中心の時代であったといえましょう。

文部省は、1964年の東京オリンピックを前にして社会体育・スポーツの振興策を図りました。スポーツ少年団の設立、社会体育指導者の育成、地域スポーツ講習会の開催とこれへの参加者による地域スポーツクラブの結成、スポーツテストの作成・普及、施設用具の整備充実など、私も文部省の先輩といっしょにそれ等の仕事に参加しました。

それから半世紀、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを前にして、わが国は本格的生涯スポーツの時代に直面していると私は考えています。スポーツ庁の新設はこの時代が生み出したものといえましょう。

### 1920～30年代のドイツ・オーストリアの革新「拡大と深化」

1920年代のドイツ・オーストリアの体育・競技スポーツの指導者たちは新しい体育・スポーツの時代に向けて、近代体育・競技スポーツを抜本的に革新する運動をおこしました。その革新のスローガンは「拡大と深化」でした。

国民の体育・スポーツの基盤である学校の教科体育の改革に始まり、大学の学生のための必修体育の導入、大学での学校と地域の各種スポーツ指導・経営者の養成や研究体制の確立、全国的競技大会の開催、スポーツ施設・用具の開発やスポーツ場法の制定の推進等である。

この革新運動によって、ドイツ・オーストリアは現代的な体育・スポーツ王国への道を歩み始めました。わかりやすい一例として、オーストリアのスキー王国への歩みを挙げましょう。学校教育へのスキー教材の導入と必修スキー教育制度、ウィーン大学やインスブルック大学等でのスキー指導者養成、研究体制の整備によるスキーの科学的研究や指導理論・指導教本の制定、スキー用具の開発やゲレンデの整備、スキー関連企業の支援等、スキーの総合的革新によるスキー王国への歩みです。

### わが国の本格的生涯スポーツの課題「多様化と深化」

わが国の生涯スポーツは「誰でも、どこでも、生涯を通して、自分の生活や希望に見合ったスポーツ」ができる体制を理想として、1960年前後から展開された「スポーツ振興運動」でした。それから半世紀を経て、今、本格的な生涯スポーツ時代の幕開けを迎え、明治以来の学校体育と競技体制の伝統では解決できない「多様化」の問題に直面しています。

幼児や老人や健康弱者や障害者の問題、学校運動部の問題、世界トップ競技選手育成の問題、スポーツ組織の経営や地域振興スポーツ体制の確立等々。

この「多様化」の時代にこたえる指導と経営の学術理論を「深化」し、行政・大学・学校・協会・地域の協力で本格的な生涯スポーツ時代を迎えねばなりません。

### 「多様化と深化」のための中・四国小体連の1つの課題「生涯スポーツ時代の教科体育実践理論の構築」

ここで思い出すのは、1920年代のドイツ・オーストリアの革新家たちによる「革新の基盤は教科体育にある」という主張と取り組みです。

これまで中・四国小学校体育連盟の先輩たちが授業実践の中から構築した「良い授業を継続するための教科体育の理論」すなわち「体育好き先生がいて、校長先生のリーダーシップが発揮され、学校教職員・保護者の協力があり、教委や関係団体・産業界などの支援体制が確立しているという理論」を学びつつ、連盟が創立100周年に向かって、本格的生涯スポーツ時代の基盤を形成する新しい教科体育の実践理論、例えば「学術理論に基づく教科書を誰でもどこでも正しく使える方法論」を構築することを私は期待しています。

# 第54回 中・四国小学校体育研究大会（島根大会）報告

## 1 はじめに

国宝松江城に象徴されるように数々の歴史と文化を有する島根県松江市において、第54回中・四国小学校体育研究大会が開催されました。会場校の母衣小学校には、県内外から530名の先生方にご参会いただき、大変有意義な大会となりました。

本県では、研究主題「動いて気づく できていかす しまねっ子」の下、「特性にふれ、動きを高めていく単元構成と授業構成の追求」「動きを高めていくための手立ての追求」「子どもの言語活動や評価の効果的な活用の追求」という三つの共通の研究視点を持ち、県小体連、各市郡小体連、会場校がしっかりと連携し、主体的に実践研究に取り組んできました。大会当日、多くの方々からいただいた貴重な意見を参考に、さらに子どもたちが運動の持つ特性にふれ、運動の醍醐味を味わえるような授業づくりを目指していきたいと思います。

ご指導いただいた先生方をはじめ、関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。

2 期 日／平成28年10月21日（金）

3 会 場／松江市立母衣小学校 松江市総合体育館

4 大会主題／ **動いて気づく できていかす しまねっ子**  
～動きを高め、運動の醍醐味を味わう体育学習～

## 5 公開授業

	学年	領域	単元名	指導者	指導助言者
公開授業①	1年	表現リズム遊び	とびだせ！ゆめのおもちやばこ	野村 智子	梶谷 朱美（島根 西日登小 校長）
	3年	器械運動（鉄棒）	ちょうせん！だるままわり	福間 京	松本格之祐（桐蔭横浜大学 教授）
	4年	ゲーム（ネット型ゲーム）	つなげ！楽しいシュートプレル	堀江 徹	野津 明久（島根県保健体育課 指導主事）
公開授業②	2年	ゲーム（ボールゲーム）	ねらえ！ナイスシュート	島崎 明子	辻 延浩（滋賀大学 教授）
	3年	保健（毎日の生活と健康）	めざせ！けんこうの達人	小林香奈恵	吉谷不美男（島根 須佐小 教頭）
	5年	陸上運動（短距離走）	走り切れ！8秒間走	伊藤 和子	矢田 悦夫（島根 川合小 校長）
	6年	体づくり運動（体力を高める運動）	高めよう！わたしの体力	別所 教徹	白旗 和也（日本体育大学 教授）

## 6 分科会

No	分科会	分科会テーマ	担当 (上段県外・下段県内)
1	体づくり運動 (体ほぐし)	動くことの心地よさを味わいながら、「みんなと動く面白さ、みんなで動く面白さ」を味わう子どもを育てる。	山口県 大田市
2	器械・器具 (低)	取り組みやすい適切な運動教材を工夫し、特性にふれた子どもの言葉を生かした授業づくりを通して、仲間とかかわりながら動きを高め、面白さを味わう子どもを育てる。	鳥取県 安来市
3	走・跳の運動 (低・中)	走・跳の技能習得のためにコツを見つけたり、場の設定の工夫を通して取り組んだりすることで、仲間とかかわりながら動きを高め、体を動かす面白さを味わう子どもを育てる。	広島県 邑智郡
4	ゲーム (低・中)	基本的な動きを身につけ、動きの高まりを感じながら、みんなでゲームの面白さを味わう子どもを育てる。	鳥取県 鹿足郡
5	体づくり運動 (多様な動き・体力)	基本的な動きを総合的に身につけさせることによって、動きの高まりを感じ、思ったように体を動かすことの面白さを味わう子どもを育てる。	岡山県 仁多郡
6	器械運動 (中・高)	技の中核的技能にかかわるポイントを明確にし、基礎感覚作り、補助を中心としたかかわりを行うことによって、動きを高め、面白さを味わう子どもを育てる。	広島県 出雲市
7	陸上運動 (高)	期待する動きの姿を明確にし、技能的特性にふれながら、動きを高め、面白さを味わう子どもを育てる。	高知県 隠岐郡

8	水泳 (低・中・高)	水泳カードや事例集を活用して、めあてをもちかかわり合いながら動きを高め、泳力を高め、泳ぐことの面白さを味わう子どもを育てる。	香川県 浜田市
9	ボール運動 (高)	ボール運動の様々な動きを身につけ、動きの高まりを感じながら、仲間とかかわりあってゲームを進めていく面白さを味わう子どもを育てる。	徳島県 雲南市・飯石郡
10	表現運動 (低・中・高)	身につけさせたい動きを明確にし、学習場面の工夫をする中で動きを高め、表現することの面白さを味わう子どもを育てる。	山口県 松江市
11	保健 (中・高)	健康や安全について確かな知識を得て、活かそうとする意識の高まりのある子どもを育てる。	愛媛県 益田市

## 7 パネルディスカッション 「現行の学習指導要領の総括と新学習指導要領の展望」 (地震により中止となったため、3人の講師の先生から特別寄稿をいただきました。)

桐蔭横浜大学 スポーツ健康政策学部 教授 松本 格之祐

### 1. これまでの学習指導要領への感想

私が小学校教員になった昭和50年頃、「楽しい体育」を標榜する学習指導要領（以下、要領）が世に出る前でした。また、当時の要領は体力向上を大きなねらいにしていますが、体育嫌い・運動嫌いが問題になっていた時期でもありました。

当時は昭和43年（1968年）に改訂された要領で、1年から6年まで1年毎に体操・器械運動・陸上運動・水泳・ボール運動・ダンスの6領域が示されていました。また、要領の指導書（現・解説）は300ページものボリュームがあって例示も詳細に示されており、懇切丁寧でしたが画一的な指導を誘導するものでもありました。

教員1年目にもかかわらず文部省主催の泊まり込みの研修会に参加でき、2年後に世に出る要領についての解説を杉山重利先生から直接伺いました。もう41年前のことになります。先述した低学年から明確な枠組みで示された6領域から低学年で基本の運動・ゲームの2領域になったこと、体操・陸上運動・ボール運動については5年生からの領域になったことが驚きでした。とりわけ、多くの内容を含んだ基本の運動を設定した考え方は理解できましたが、指導資料でも示された「めあて学習」については、最終的にそうありたいというモデルとしてはいいのですが、そのまま目の前の子どもたちに適用しようとしても、現実の授業・児童の実態と大きな隔たりが見られることも少なくなかったように思います。

さて、その後の1998年・2008年の要領は、現場の授業を望ましい方向に変えるものであったと受け止めています。また、要領の変遷を概括する際に相対するキーワードとして示される「楽しさ」と「技能や体力の向上」は、決して対立するものではなく、「豊かな体育授業」を求める上では2つ共に大切な目標になるべきものです。

以下、現行要領等についての私見を述べてみます。

### 2. 現行要領の改善点への私見

#### (1) 4・4・4の体育

「多様な動きづくり」「運動の経験」「運動の継続」という4・4・4の流れは、6年・3年・3年という各校種の年限とは別に、発達という観点とそこでの重点となる学習のねらいを新たに示してくれました。ただし、当初から危惧されたのは、各々の多忙さの中での校種間の連携です。特に小学校と中学校の連携が心配されました。学期に一度は授業を参観しあうという話もお聞きしたことがありますが、現実にはどうなのでしょう。また、小学校5・6年と中学1・2年はそれぞれ「運動の経験」が学習のねらいになりますが、相互の連携の有無は子どもたちの学習に大きく影響しそうです。教育実習訪問等で年に何度か中学校にお伺いして授業を参観させていただいていますが、小学校・中学校ともに相互の指導や子どもたちの実態から学びあう必要があると感じています。4・4・4の体育が基本的に維持されるのであれば尚更です。

最近、幼小の連携が言われています。30年近く小学校の現場にいましたが、1・2年と3・4年の発達の違いは大きいと感じていました。4・4・4は4年生と5年生で区切っていますが、むしろ2年生と3年生の区切りの方が妥当のようにも感じています。つまり、幼稚園年中～2年生の4年間のまとまりです。平成27年11月に島根県奥出雲地区で、年長・小1・小2の合同授業を担当する機会がありました。成長の違いは大きいと感じましたが、指導で困るようなことはありませんでした。今後、幼・小の連携が進めば、最初の4年のまとまりは幼稚園年中～2年生の4年間にすることも検討されるべきでしょう。

#### (2) 指導内容の系統性

文部科学省の調査（平成25年）によれば、それまで嫌いだった体育が好きになったという子どもの第一の理由が、「できなかった運動ができるようになったこと」でした。つまり、体育が嫌いだった子どもにとって、取り組む運動が「できるようになる」ことが重要だということです（「できる・できない」という評価を下す基準の設定は、教師にとって大変に重要な課題でもあります）、運動を楽しむためには一定の技能が必要になります。そこで、取り組む運動の技能が向上する・取り組む運動課題を達成できるようにする・楽しむための基礎技能を獲得するためには、易しい運動・課題から難しい運動・課題という系統性が重要になります。

### (3) 指導内容の明確化

授業で運動教材を指導する際に大切になるのが、何を教えようとしているのかといった学習内容が明確になっているかということです。これが意外に指導者に自覚されていない場合が多いのです。例えば、ボール運動の最初にボールを投げ合う（=キャッチボール）、ゴールにボールを入れる（シュートする）ということを行わせる際に、「どこに気をつけて運動に取り組むのか」「結果が自己評価・他者評価できるようになっているか」が明確にされているかということです。このことが曖昧であれば、子どもたちに掛ける言葉や具体的に認め励ますこと（評価活動）も曖昧にならざるを得ません。

この教材・授業で子どもたちに何を学ばせるのか、何を学ばせることが可能かということについて、もっと自覚する必要があるでしょう。

### (4) ボール運動・球技の「型」によるまとめ

2000年を越えたあたりから、多様なボール運動が出現したように理解しています。例えば、ニュースポーツ、ボールの投捕の技能向上が必要ないゲーム、用具やルールが工夫されたゲーム等が百花繚乱の状態でした。そのこと自体は決してマイナスではありませんが、これらを整理しないと、各学級・学校・地域で全く経験しないゲームが出てきてしまうということになります。また、教師が、何のために・何を取り上げるかが分からないということにもなりかねません。その意味で、ボール運動・球技が3つの型に整理・集約して示されたことがとても意味あることだと受け止めています。

ただし、ベースボール型が抱えている問題（運動量の少なさ、ルールの難しさ、技術の難しさ）について、その解決は教師に委ねられています。

### (5) 体づくり運動の重視

1998年の要領の改訂に際して各教科の授業時数が一律カットされましたが、体育科は2008年の要領で小1～小4の授業時数が90時間から105時間（保健体育科の中学校も同様）に回復しました。全く回復しないままの教科もあったわけですから、体育科・保健体育科が回復したのはそれなりに理由があったわけですが、それが「体力の向上に体育授業が貢献する」ということでした。そして、具体的な貢献が「小学校1年から高校3年まで、毎年、必ず体づくり運動を指導する」ということでした。

直近の小学校5年生・中学校2年生の新体力テストの結果が調査以来最高の結果であったと報告されています。今後、要領の改訂に伴う体づくり運動の重視の成果というように喧伝され、改訂中の要領でも体づくり運動の位置づけは変わらないでしょう。さて、体力向上は児童にとって、授業における学習目標になるのでしょうか。

### (6) 知識の習得

小学校の現状では、知識は評価しないことになっています。知識を評価対象にする保健の授業があることと、知識の獲得が主要な学習活動になることへの危惧からなのでしょう。しかし、運動に取り組む際に、対象となる運動について知っていなければ指導はできないし、運動のポイントやポイントを達成するための方法を知っていないと学習成果は上がらないでしょう。その意味では、知識は学習に欠かせないものなのです。

## 3. 今後の展望

駄文をお読みいただける頃には、新要領および解説が世に出るようです。新要領改訂の具体については白旗先生からご紹介いただけるのですが、時代の要請や体育授業の抱える問題を受けて要領は改訂されているようです。また、要領に沿った授業のあり方については、特定の学校で検証されているようです。要領への理解を深めるとともに、目の前の子どもたちの実態に合った体育授業と確かな成果を追求していく必要があります。

滋賀大学 教育学部 教授 辻 延浩

### 1. はじめに

島根県小学校体育連盟との繋がりのきっかけは、私が兵庫教育大学附属小学校で研究主任をしていたとき

(平成13～15年度)に、当連盟幹部の先生方が研究発表大会に参加していただき、そのときの授業と分科会の提案と教科研究の仕方に賛同・共感いただけたからだと窺っている。大学に着任(平成16年度)してから、延べ9年間に亘って授業実践を通じた研究協力をさせていただいている。島根県の先生方はとても熱心に、かつ真摯な姿勢で授業研究に取り組んでおられる。授業は「子ども」「教材」「教師」の三要素で構成されているが、「子どもと教材」との関係性を軸とした教師の指導・支援のあり方について、実践をもとに理論を構築しようとされている姿に大変感銘を受けている。特に、分科会：「体ほぐしの運動」で提案発表された大田市小学校体育連盟においては、延べ8年間、「体ほぐしの運動」の教材開発と学習過程および単元構成の研究に取り組んでこられた。子どもの学びの姿を軸とした地道な取組には敬意を表す。次期学習指導要領改訂に対して、今後もいろいろと議論されると思うが、決して「理論」を先行させるのではなく、あくまでも子どもの思いや願いをもとにした「実践」を基軸に進まれることを期待する。

## 2. 現行の学習指導要領の成果と課題

〈改善の基本方針を踏まえて〉

(1) 小学校から高校までの12年間を「発達の段階」を踏まえて、まとまりを考慮すること

いわゆる「4・4・4」の考え方は定着してきているように感じている。小学校1年生から4年生まで(はじめの4年間)は「○○遊び」や「○○運動」と表現されているように、どの子どもが自ら進んで運動に取り組む、基礎的・基本的な技能や感覚を確実に身につけられるようにすること。小学校高学年から中学校2年生まで(なかの4年間)は簡易化されたルールという名称のもと、運動が固有に持つ価値を崩さず、しかもその種目の楽しさを全員に触れさせるようにすること、言い換えれば、種目(教材)の面白さを経験せずして選択制を用いないこと。中学3年生から高校3年生まで(おわりの4年間)は体の発育もピークを迎え、自分の適性を踏まえて何が自分に合っているのか、適切な判断のもと、選択すること。こうした学習者の「発達の段階」を踏まえて、教育内容と方法にまとまりをもたせる考え方は身体教育を軸とする体育科および保健体育科においては今後も踏襲されるべきである。

(2) 小・中・高の系統性を踏まえ、指導内容の体系化を図ること

これについてはまだまだ課題が残っている。とりわけ、ゲーム・ボール運動の系統性において、ゴール型、ネット型、ベースボール型と種目に捉われない内容構成が提唱されたが、各学校において、どれだけカリキュラムの整理ができているのか、と感じる。現在進行中の学校もあると思うが、私が研究会等で見聞きする限り、ゴール型>ネット型>ベースボール型の順で教材開発が行われているようである。できるだけ早く、それぞれの型におけるルール、作戦(戦術)、個人技能・集団技能、マナーに関する指導内容の体系化を図る必要がある。

(3) 子どもに身につけさせたい内容を具体的に示し、指導内容の明確化を図ること

この問題についてはかなり意識されて指導内容の明確化が図られている。その結果、これまで体育の授業を苦手としていた教師が単元や一授業の計画を立てられるようになり、実践の幅が広がってきているように思われる。しかし一方で危惧されることは、身につけたい力の細分化やスモールステップ化によって、授業の効率化が進行し、子どもの思考認識の過程が軽視される授業に出くわすようになったことである。ボールゲームを例にすれば、「ドリルゲーム」、「タスクゲーム」、「メインゲーム」といったゲーム・ボール運動学習のモデル化が進み、比較的多くの教師がゲーム学習を組み立てられるようになった反面、子どもの内面的な問いや気づきを大切に、「個性的」な授業が少なくなっている。いわゆる形式にこだわり、教師が子どもの学びをコントロールしすぎているように思われる。子どもが勝つことにこだわり、作戦を仲間と話し合い、勝利した瞬間に歓声をあげたり、負けたときには悔しがったりしながら、自分たちでゲームを創り上げていくことはゲーム学習の「不易」である。

## 3. 展望

最近、「アクティブ・ラーニング」という言葉をよく耳にする。これはもともと高等教育の授業改善を目的として登場したものであるが、初等中等教育においても授業のアクティブ・ラーニング化がすべての教科において求められている。国語や算数などのいわゆる「座学型」の授業はもちろんのこと、体育など「実技型」の授業にもアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が必要とされている。一見すると体育などの「実技型」の授業では、活動そのものが主体であり、子どもたちは動いて活動するがゆえに「アクティブ・ラーニング」だと捉えがちであるが、授業中の子どもの「内的活動の能動性」に着目した際、必ずしも子どもたちが動いているからといってアクティブ・ラーニング型の授業であるとは言い切れない。「活動あって学びなし」の授業には、子どもの主体的・対話的な深い学びは少なく、質の高い学習成果を期待することはできな

い。以下、体育においてアクティブ・ラーニング型の授業を展開する際の基本的な考え方について述べたい。

(1) 体育における「主体的な学び」とは

最近では、学習の見通しを持たせるために、授業の始めにどのような活動を行うか伝える場面がよく設定されている。ここでは教師が活動の手順を示すことで、子どもたちが常軌的に活動を展開させる。言い換えれば、学習をルーティン化して、子どもが次から次へと自分たちで進めていく「外的な能動性」をもって「主体的な学び」と捉えているようである。果たしてこのような授業を「主体的な学び」と評してよいのだろうか。とりわけ体育には、教師が単元序盤に活動をパターン化して子どもに教え込み、慣れさせ、迅速に無駄なく動いている授業を「運動量が確保された、体育らしい授業」と思い込む古い体質が潜んでいるように思える。子どもたちが解決したい課題（めあて）を持ち、粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、思考の「内的な能動性」のプロセスが、身体活動として外化されたとき、「外的な能動性」として評価される（溝上,2014）と考える。「運動量の呪縛」から解き放たれ、質の高い「運動学習」の展開を期待したい。

(2) 体育における「対話的な深い学び」とは

体育ではグループ学習が他の教科よりもよく用いられているが、グループで活動していれば「協働的な学習」ができているというわけではない。仲間との学習を通して自らの考えを確かめたり、広げたりする、修正したりすることが重要であり、「対話的」という用語にその意味が込められている。また、「深い学び」とは、教科等で学んだ見方や考え方、行い方などを自在に活用して自分なりの解を導き出せるような質の高い学習を指しており、体育の授業では、これまで以上に子ども一人ひとりの学びに着目し、他者との協働や外界との相互作用を通じて誰がどんな学びをしているのか、丁寧に見届ける必要がある。そのためには評価方法の工夫が求められ、グループ内の特定の文脈で生起するパフォーマンスを評価する「パフォーマンス評価」や、運動の過程で生み出される記録やファームを系統的に蓄積する「ポートフォリオ評価」が「真正の評価」に向けた取組として重要視されよう。

日本体育大学 体育学部 教授 白旗 和也

学習指導要領は、これまでの成果と課題を踏まえて「作成する」という目的とそれに基づいて「実施する」という目的があります。改訂の趣旨としては「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る」ことでした。このことを目指し、小学校から高校までの12年間を「発達の段階」を踏まえて、4年ごとのまとまりを考慮して、指導内容を明確化し、体系化を図ったことは、作成上の目的になります。このことは子どもの体育における学びを考える上では一歩前進だと思えます。ただし、技能に関しては時間を要したものの、「態度」「(知識) 思考・判断」については、まだ課題も多く残っています。教育全体の方向性や社会情勢、子どもの実態なども考慮しながら、今後も修正が図られる必要があります。

次に実際の授業ですが、指導内容の明確化を踏まえた指導などが見られるようになったと感じています。目標・内容・方法・評価を一体としてよく考えられた授業が増えたのではないのでしょうか。ちなみに、8月に公表された体育・保健体育のワーキンググループの報告では、小学校体育の成果として、「運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと」「体力の低下傾向に歯止めがかかったこと」が挙げられています。これは偏に先生方が運動することの楽しさや喜びを伝える授業を提供されたことに尽きると思えます。しかし、一方では課題として「習得した知識や技能を活用して課題解決すること」「学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること」「運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向がみられること」などが挙げられています。

今後の教育として3つの育成すべき資質・能力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が示されています。生きる力をより確実に育成する観点から、各教科にとどまらず、日本人としてどのような力を育てるのかを言葉にしたということですが、そもそも体育の構造に似ているように思います。体育は全人的な育成を目標にしていますので、類似してくるのは当然かもしれません。しかし、まだ、その実現に向けては課題が多いということが示されているのだと思います。「何を学ぶか」と同時に「どのように学ぶか」を再度模索する必要があるようです。また、究極的な目標である豊かなスポーツライフを考えると、指導内容の体系化を念頭に置いた指導がさらに重視されなければならないと感じています。小学校の教員はどうしても、担任している学年のことを中心に考えます。それは大切なことなのですが、高学年の担任ばかりしていると、低学年の体育に疎くなることはないでしょうか。発達の段階を踏まえるというのは、低学年には低学年にふさわしい体育があります。今後は幼児期との接続がいっそう重視されます。幼児期は「運動的な遊び」という言葉が用いられ、小学校低学年では、「運動遊び」になります。そ



して中学年では「運動」になります。この違いをどのように認識しているのでしょうか。ある意味これらの言葉は発達段階に応じた体育の授業を象徴しています。中央教育審議会小学校部会のまとめ案では、「低学年においては、その2年間で表れた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響している」と述べられており、全教科共通する課題でもあります。このことから、低学年の体育のあり方をもう一度見直さなければならぬと思っています。

また、授業改善が図られているとはいっても、すべての先生がとは言えません。全国43万人ほどの小学校体育を指導する先生方に、改訂の趣旨に沿った授業を浸透させていくのは、至難の業です。大型タンカーの舵を切るような感じですから、必死になって舵を切ってもほんのわずかずつか、向きは変わっていかないかもしれません。しかし、舵を切るのをやめたらいずれ止まってしまいます。現在、スポーツ庁の委託事業で「体育の苦手な先生のための研修プログラム作り」に取り組んでいます。この夏も多くの都道府県の先生方と実技や演習を行い、授業づくりをいっしょに考えました。そこで改めて感じたのは、他教科に比べて体育の指導を普段から勉強されている先生と、この研修の対象で参加いただいた多くの先生方とのギャップが大きいということ、そして、体育の授業づくりに苦勞されている先生方の学ぶ機会が少ないということです。研修において解説の読み方を確認すると「そうだったのか」と目を輝かせていました。予想以上に参加者が多く、ニーズは高いことも認識しました。豊かなスポーツライフを考えると、授業の質保障について、育成・研修の面からもいっそう改善が必要だと感じます。

前述のワーキンググループの報告では「子どもの体力について、低下傾向には歯止めがかかっているものの、体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると、依然として低い状況がみられること」も挙げています。体力は単純に新体力テストの結果ではないことは言うまでもありませんが、一朝一夕に体力が向上するものではありません。運動とよい関係を築き、様々な生活の中で運動に親しむ必要があります。その視点から体育の授業を考えると、スポーツ基本法の第二条に示されているように「いつでも、どこでも、だれでも、自分に合った運動スポーツと末永くかかわっていける」ようにする必要があります。継続の原動力は何でしょうか。運動することの魅力と運動そのものの魅力（楽しさ）、そしてよりよく関わっていける自信（有能感）ではないかと思っています。これが今言われている「体育・スポーツの見方や考え方」の基盤になるでしょう。それをすべての子どもが享受できる場は、体育の授業です。そのためには、授業ではいっそうの教材開発やカリキュラム研究が不可欠のように思います。体育は教科指導として位置づいている以上、「体育では何が学べるのか」が問われます。1単元6時間や8時間という限られた時間の中で、しっかり身に付けるべきことは、押さえなければならない。そして、それが3つの資質や能力の育成につながっていくように「どのように学ぶか」も重視する必要があります。正直なところ、体育ではこれまでもそうした方向で授業づくりをしてきたはずですが。現行学習指導要領の説明会でも、「授業をつくる上では『何を学ぶか』『どのように学ぶか』の両面から授業を構築してください」と言った覚えがありますし、プレゼンも残っています。つい新しいことに目が向きますが、「日本の体育の本質、長所」を見失わないことが大切だと思います。

私は大学に来てから、小学校体育を様々な角度から考え直すきっかけをもらいました。現在、JICA（青年海外協力隊）の技術顧問という肩書きもいただいています。嫌でも世界の中での日本の体育の立ち位置を気にすることになります。驚くのは、日本の体育への期待と多様性です。対応しきれないほどの多くの国から日本の体育を導入したいというオファーが来ます。その理由が体力向上や技能の獲得だけでなく、情操教育や協調性の育成、そして課題解決能力の育成と様々なのですが、他の先進国よりも人をバランスよく育成できる学習指導要領だと判断されているようです。スポーツ基本計画で幼児期運動指針がクローズアップされてから、幼児期との関わりが格段に増えました。また大学では中学校、高等学校の教員養成を担当していますので、こちらに関わりが多くあります。教科調査官をしていたときは、小中高の系統性で小学校体育を見ていたつもりですが、今から思うと狭い範囲の知識しかありませんでした。

教育は常に30年後くらい先の日本の将来を想像しながら考えられます。2030年を見通してと審議のまとめには書かれていますが、実際は2050年くらいまでを勘案しているのではないかと思います。そのころの日本はどうなっているか見通せないですね。すると、一人ひとりに確実に人としての力を育成し、自立して生きていける力をつけていく必要があります。そのためには、この3つの資質や能力の育成は不可欠なのです。教科において何を学ぶだけでなく、人として何ができるようになるかを教科領域を越えて主に統合整理している。そして課題としてどのように学ぶかを明確にしている。そうした点では、教科レベルではなく、教育全体の大きな改革だと認識しています。そのような総合的な教育の中で体育の価値は益々高くなり、期待が寄せられると思います。課題を真摯にとらえつつ、いっそうの体育の授業の充実が日本の子どもの成長に不可欠なものと思っています。

## 友達と共に楽しみ、高め合う体育の授業実践

「みんなでたのしいみずあそび～ともだちのいいところを見つけよう～」 1年 水遊び

『わたしたちのたいいく』P.18～21

香川県坂出市立川津小学校 教諭 田岡 秀雄

### 1 はじめに

本単元は、水遊びを通して、水につかって移動することや、水に浮いたりもぐったり、水中で息をはいたりすることをねらいとしている。多くの子どもたちは、幼稚園や保育所などで水遊びを体験している。しかし、それぞれ水遊びの経験に差があるために、授業に参加する際に見通しがもてず、不安になる子どもがいる。そこで、『わたしたちのたいいく』を活用し、挿絵を見て活動の見通しをもたせたり、ふしうきや水中で息を吐くときのポイント等を確認させたりすることで、誰もが意欲的に学習に取り組めるようにした。そうすることで、自分なりに、体の使い方のポイントをとらえたり、友達とコツを共有化したりして、基礎的な技能や水中感覚を高めていくことができる考えた。また、帰りの会等の授業時間外にも『わたしたちのたいいく』を活用し、体育に関する友達のよいところを伝え合って記入するようにした。それにより、友達のよさを自分に取り入れながら、主体的に学ぶ子どもを育てようと考えた。

### 2 実践内容

(1) 単元名「水遊び」『わたしたちのたいいく』 1年 P.18～21

(2) 単元目標

- 水に浮いたり、水にもぐったりできるようにする。 【技能】
- 水に慣れる遊びや、浮く・もぐる運動に進んで取り組み、運動の順番を守り、友達と仲よく運動することができるようにする。 【態度】
- 水につかったときの動き方や、水に浮いたりもぐったりする動きを知り、友達のよい動きを見つけることができる。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全11時間）

第1次（1時間）	第2次（2～6時間）	第3次（7～11時間）
○オリエンテーション ・学習のねらいと進め方を知る。 ・施設の使い方や、安全について知る。 ・「やってみよう」を行う。	○水に慣れる遊び ・活動①の水遊びを行う。	○浮く・もぐる遊び ・活動②の水遊びを行う。 ・できるようになったことを発表会で発表する。

(4) 授業の実際

#### ① 導入 オリエンテーションでの活用

初めての水泳授業ということもあり、子どもたちの授業に対する関心は高い。しかし、プールでの授業を行う際には様々なきまりがある。そこで、『わたしたちのたいいく』を活用して安全な水泳学習を行うためのきまりについて指導した。プールで活用する際には、濡れるのを防ぐために、ビニール袋をかぶせて使用した。



## 【学習の流れ】

- 1 プールで気を付けることを考えて発表する。  
・先生の言うことを静かに聞く。 ・自分勝手なことをしない。
- 2 『わたしたちのたいいく』のプールでのきまりを教師と一緒に読んで確認する。
- 3 その他の安全・健康に関して教師からの話を聞く。  
※ 自分たちで気を付けることを考えて発表した後、『わたしたちのたいいく』を使って、きまりを確認したことで、プールでのルールをより深く理解することができた。

### ② 授業中での活用

授業の導入として本時で行う「電車ごっこ」等の遊びを『わたしたちのたいいく』の挿絵で確認させた。そして、複数ある遊びの中から、特にやってみたいと思う遊びを選択させてから、実際にプールに入り活動した。その後も、次の活動を行う際には、プールサイドで挿絵を見せて活動の見通しをもたせてから、プールに入らせるようにした。プールでの遊び経験が少ない子どもにとって、挿絵からイメージを膨らませることで、意欲的に活動を行うことができた。



『わたしたちのたいいく』 1年 P.18



### ③ 振り返りでの活用

授業後、「学しゅうのまとめ」の3つの観点で振り返りを行った。



学しゅうのまとめ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
いろいろな水遊びをすることができましたか。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
きまりをまもって ともだちと なかよく学しゅうすることができましたか。	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ともだちのよいうごきや たのしいあそびかたを見つけることができましたか。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

いろいろな水遊びに挑戦したよ。

○○さんのよい動きや、楽しい遊び方を見つけることができたよ。

決まりを守って、友達と仲よく学習することができたよ。

### 【授業後の児童の感想（友達のよいところ見つけ）】

例 けのびを学習したとき

- ・ Aさんは、教科書の絵みたいに肘がピンと伸びていました。
- ・ Bさんは、足がそろっていたから遠くまで進んだよ。



## 3 終わりに

『わたしたちのたいいく』に掲載されている挿絵を活用することで、具体的にポイントを理解することができた。どのように体を動かしたらよいのかを具体的にイメージできたことで、友達のよい動きを見つけやすくなった。また、子どもたちが遊びの見通しをもてたことにより、「自分もやってみよう」という意欲の高まりが見られた。単元を通して高い意欲で取り組めたことで、技能の習得のスピードも速くなったのではないかと考える。今後も『わたしたちのたいいく』を活用して、子どもに活動の見通しをもたせたり、動きのイメージを膨らませたりして、誰もが意欲的に取り組める授業づくりに取り組んでいきたい。

## 友達とかかわり合いながら楽しく運動できる体育科の授業実践

「めざせ!本川スーパーマン」 1年 体づくり運動 (多様な動きをつくる運動遊び)

『わたしたちのたいいく』P.50～53

広島県広島市立本川小学校 教諭 龍野 仁美

### 1 はじめに

体育科の学習が「楽しい」と思える要素として、友達とかかわり合いながら様々な運動をすることが考えられる。また、「できた」という成功体験を増やすことも大切である。今回、『わたしたちのたいいく』のイラストを掲示し、運動が苦手な子どもへの視覚的支援としたり、振り返りの際の手だてとしたりして活用し、子どもたちが自分で動きを工夫し考えていくことができるようにしていきたい。また、多様な動きをつくる運動遊びを通して、友達と一緒にペアやグループで運動することの楽しさや運動の広がりを実感してほしい。

### 2 実践内容

(1) 単元名「めざせ!本川スーパーマン」『わたしたちのたいいく』 1年 P.50～53

(2) 単元目標

- 体のバランスをとったり移動をしたりすることができるようにする。 **【技能】**
- 運動に進んで取り組み、きまりを守って仲よく運動したり、場の安全に気を付けたりすることができるようにする。 **【態度】**
- 体づくりのための簡単な運動の行い方を工夫できるようにする。 **【思考・判断】**

(3) 単元計画 (全5時間)

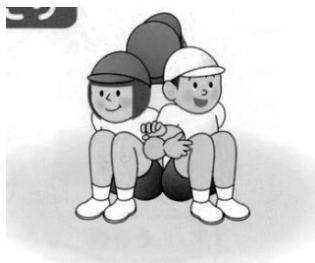
時	学習活動	教師の支援
1	<p style="text-align: center;">オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアやグループで体ほぐしの運動を行い、体を動かすことの楽しさを実感する。</li> <li>・ペアやグループで動きを工夫して考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○『わたしたちのたいいく』のイラストを示し、手本にして運動できるようにする。</li> </ul>
2	<p style="text-align: center;">バランスをとる動きにチャレンジしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体でバランス遊びをする。</li> <li>・ペアでバランスをとる動きを考え、工夫する。</li> <li>・考えた動きを全体交流する。</li> <li>・交流したことを取り入れ、再度ペアで動きを工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○運動の工夫ができるように、教師も一緒に運動したり、声をかけたりする。</li> </ul>
3	<p style="text-align: center;">どうぶつにへんしんしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアでへんしん遊びをする。</li> <li>・ペアで決めた動物の動きを工夫する。</li> <li>・考えた動きを全体交流する。</li> <li>・交流したことを取り入れ、再度ペアで動きを工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○工夫して運動している子どもを取り上げ、その都度称賛する。</li> </ul>
4	<p style="text-align: center;">スーパーマンパワーをつけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで力試し遊びをする。</li> <li>・ペアで力試しの動きを考え、工夫する。</li> <li>・考えた動きを全体交流する。</li> <li>・交流したことを取り入れ、再度ペアで動きを工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○見合う時間を設け、子どもたちが動きのポイントや工夫している点を見つけることができるように声をかける。</li> </ul>

5	<p style="text-align: center;">スーパーマン検定にチャレンジしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3つのコーナー（バランス・へんしん・スーパーマンパワー）に分かれ、ペアで一緒に回り、動きを考え、工夫する。</li> <li>・考えた動きを全体交流する。</li> <li>・交流したことを取り入れ、再度ペアで動きを工夫する。</li> </ul>	<p>○今まで示した動きのイラストを掲示し、視覚的材料としたり、動きをもとに新たに工夫をしたりできるようにする。</p>
---	---	--

#### (4) 授業の実際

##### ① 学習内容の明確化と視覚的支援を図る掲示の工夫

子どもたちに、活動内容の見通しをもたせるために、『わたしたちのたいいく』に載っているイラストを拡大し、掲示した。子どもたちは「足が○○になっているね。」「手は○だよ。」とイラストを見て、動きのポイントに注目しながら活動することができた。また、どのように動いてよいか分からない児童にとっても、イラストの掲示は視覚的支援となり、真似をしながら動くことができた。イラストの動きを見ながら運動したあと、今度は自分たちで工夫して新しい動きを考えたり、互いに見合ったりし、より深めていくことができた。



➡  
向きを  
変えよう！



【『わたしたちのたいいく』のイラストをもとに動きを工夫する子どもたちの姿】

##### ② 振り返りカードでの活用

学習の振り返りには、『わたしたちのたいいく』P.53の「学しゅうのまとめ」に沿った観点別の振り返り項目とイラストを入れたワークシートを用い、その時間に学習した内容の振り返りを行った。イラストがあることで、ペアやグループで工夫した動きを思い出しながら記述することができた。また、毎時間振り返りを行うことで、自分の課題を明確にすることができ、次時へつなげることができた。授業の始めに前時の振り返りカードの紹介をしたり、教師が全員にコメントを書いたりすることも、学習意欲につながった。



### 3 終わりに

『わたしたちのたいいく』を活用することは、子どもたちにとってイメージを広げたり、主体的な活動につなげたりするための大切な役割を果たしているということが分かった。また、ペアやグループ等活動形態を変えていくことで、考えもより深まり、友達とかかわり合うことの楽しさを感じながら活動することができた。今後も、子どもたちが互いに高め合っていくことができる授業づくりに取り組んでいきたい。



## かかわり合い高め合う体育学習

「小型ハードル走」 4年 走・跳の運動

『わたしたちの体育』4年 P.40～45

高知県高知市立秦小学校 教諭 石川 悠

### 1 はじめに

本単元は、走・跳の運動の一つに位置づけられており、小型ハードルを自分に合ったリズムで走り越すことをねらいとしている。小型ハードル走は、連続したハードルをリズムよく跳び越すことや友達と競走すること、自分の記録に挑戦することが楽しい運動である。本単元では、その楽しさを味わうことができるように、『わたしたちの体育』を活用しながら、授業を計画した。

単元の導入では、『わたしたちの体育』を活用することにより、場の設定の仕方を確認するとともに、活動のイメージを共有し、学習への見通しがもてるようにした。また、授業中にも『わたしたちの体育』を活用し、子ども同士で動き方を確認したり、互いに評価し合ったりできる授業展開になるようにした。

### 2 実践内容

(1) 単元名「小型ハードル走」『わたしたちの体育』4年 P.40～45

(2) 単元目標

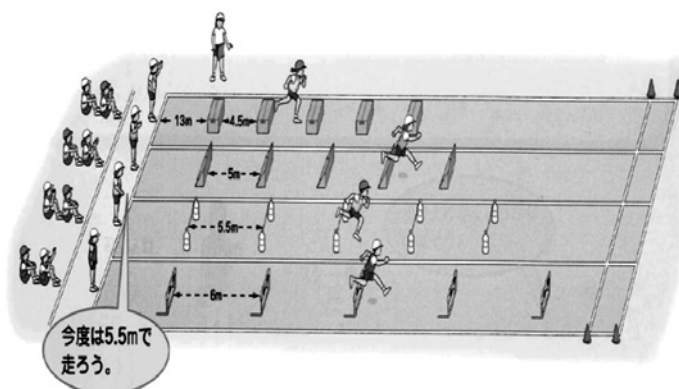
- 小型ハードルを自分に合ったリズムで走り越すことができるようにする。 **【技能】**
- 運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動したり、勝敗を受け入れたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。 **【態度】**
- 自分の能力に適した課題をもち、動きを身に付けるための活動や競走の仕方を工夫できるようにする。 **【思考・判断】**

(3) 単元計画（全8時間）

第1次（1時間）	第2次（2～5時間）	第3次（6～8時間）
○オリエンテーション ・学習のねらいと進め方を知る。 ・場の設定の仕方やきまりについて確認する。	○自分に合ったインターバルを見つけ、調子よく走り越える。 ・インターバル見つけ	○自分に合ったインターバルや小型ハードルを選んで、友達と競走する。 ・ハードル競走 ・小型ハードルリレー

(4) 意欲を継続させる工夫（運動量の確保）

『わたしたちの体育』を参考に、インターバルを様々な距離に設定した場を用意し、活動させることによって、運動量を確保するとともに、子どもが自分に合った場を見つけやすいようにした。



『わたしたちの体育』4年 P.42

また、チームで競走する活動を設定したり、50メートル走の自分のタイムと比較させたりすることによって、一人ひとりに少しでも自分のタイムを縮めようという意欲がわくようにした。

#### (5) 特性に応じた動きづくり

毎時間、授業の始めに、準備運動とともに基礎感覚づくりの運動（川とびやケンパーとびなど『わたしたちのたいいく』2年P.34、35参照）を取り入れた。

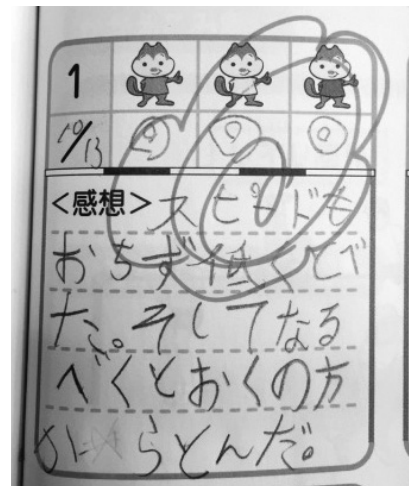
インターバルを意識させたり、ハードルを跳び越す恐怖心をやわらげたりするために、高さの低いハードルやカラーコーンを倒したものなどを用意した。また、ハードルの手前にケンステップを置き、踏み切り足を意識させるとともに、踏み切る距離を調節させるようにした。



#### (6) 言語活動（かかわり）

『わたしたちの体育』の活動のページを見ながら、動きを見合うことによって、よいところや改善すべきところなど評価のポイントを見つけ、友達同士で進んでかかわり合うことができるようにしていった。また、動きだけでなく『わたしたちの体育』の中の声かけも参考にして、友達にアドバイスしている子どもの姿も見られた。

毎時間の授業後には、『わたしたちの体育』の学習のあしあとの欄に振り返りを書かせた。動きのポイントなどを記入している子どもの振り返りを、授業前や朝の会などの時間に紹介することで、その友達のアドバイスの仕方を真似したり、動きを参考にしたりする子どもが見られた。



『わたしたちの体育』 4年 P.45

### 3 終わりに

本単元では、『わたしたちの体育』を活用したことにより、子ども自身が動きや活動のイメージを持って授業に取り組むことができた。それにより、授業の中で、子ども同士のかかわりが生まれ、互いに声をかけ合ったり、動きを評価し合ったりする姿が見られた。

また、学習のあしあとを毎時間授業後に書かせることで、子どもが運動をどのようにとらえ、授業をどのように感じているのかを見取ることが



できた。単元の始めは、感想にとどまるような内容が多かったが、授業を進めていくにつれて、動きのポイントや工夫、友達のよいところなどを書き込む子どもも増えてきた。それらの書き込みをもとに、授業を改善していくことができた。

今後も継続して『わたしたちの体育』を活用していき、かかわり合い、高め合う体育授業を実践していきたい。

# 友達と協力し、楽しみながら技を高める子どもを目指して

「もっと美しく！跳び箱運動」 4年 器械運動

『わたしたちの体育』 P.64～69

岡山県岡山市立妹尾小学校 教諭 吉田 明生

## 1 はじめに

本学校の子どもたちは、運動に対して意欲的な児童が多い。休み時間には元気に外で遊び、家庭に帰ってからも習い事で運動をしている児童の割合が高い。しかし、苦手な運動や経験の少ない運動になると消極的になってしまい、敬遠しがちである。本学年の子どもたちに対して授業前にアンケートを実施したところ、普段経験しているボール運動や陸上運動に比べて、器械運動に対しては苦手意識をもっている児童が多かった。

そこで『わたしたちの体育』に掲載されている「やってみよう」を中心に体ほぐしの運動を行ったり、掲載されている技やポイントを確認しながら活動したりすることで、子どもたちが跳び箱運動の技のイメージをとらえ、学習の見通しをもてるようにしていく。そして、子どもたちは、跳び箱運動に抵抗なく取り組み、運動のおもしろさに触れながら、活動していけるのではないかと考えた。

## 2 実践内容

(1) 単元名「もっと美しく！跳び箱運動」 『わたしたちの体育』 4年 P.64～69

(2) 単元目標

- 基本的な支持跳び越し技をすることができるようにする。 【技能】
- 跳び箱運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動したり、場や器械・器具の安全に気を付けたりすることができるようにする。 【態度】
- 自己の能力に適した課題をもち、技ができるようになるための活動を工夫できるようにする。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全6時間）

	1	2・3・4	5・6
学 習 活 動	活用場面① <b>オリエンテーション</b>	活用場面② <b>やってみよう</b>	
		活用場面③ <b>活動 ①      活動 ②</b>	
		活用場面④ <b>振り返り</b>	

(4) 『わたしたちの体育』の活用場面

### ① オリエンテーションでの活用

グループごとに跳び箱を設置し、前学年までの学習経験からできる技をやってみる活動をしたあとで、技を美しくしていく学習を子どもたちと共有した。その際、技のポイン



トとなるところを、P.64, 65を使って子どもたちと確認をした。「横とびこし」, 「開きゃくとび」, 「台上前転」それぞれの技で踏み切りから着手, そして着地での気を付けたいことを具体的に思い浮かべることができた。

また活動①, 活動②で学習していくことをP.64～67を見てつかませ, 学習のねらいや練習の場でのポイントについて見通しをもてるようにした。



『わたしたちの体育』 4年 P.64, 65

### ② 「やってみよう」での活用

子どもたちの実態から, 器械運動に対して苦手意識をもっている児童が多かったため, 「やってみよう」(P.64) の活動をほぐしの運動で取り上げることにした。この「やってみよう」の「とびこし」や「とび上がり」, 「とび下り」などは, 踏み切りから着手, そして着地へとポイントが凝縮された活動である。この活動はどの児童でも抵抗なく取り組んでいけるだけでなく, 跳び箱運動のどの技にも必要な技能を身に付けていくためにはとても効果的であった。



### ③ 活動①・活動②での活用

本単元では「技を美しくできるかどうか?」という跳び箱運動のおもしろさに向かって, 子どもたちが試行錯誤を繰り返しながら活動できるようにした。「横とびこし」, 「開きゃくとび」, 「台上前転」, 「かかえこみとび」それぞれの技をもっと美しくしようとグループで協力しながら活動している様子が見られた。その際に, P.64～67に掲載されている活動を取り上げ, その場をグループで設定して練習したり, 掲載されたポイントを参考にお互いにアドバイスをしたりしている児童が見られた。



### ④ 振り返りでの活用

毎時間の授業の終わりには, 自分の取り組みや感想を「学習のあしあと」(P.69) に書き込ませることで, 自分の活動を振り返ることができるようにし, 教師が紹介することで, 意欲をもって次時の活動に臨めるようにした。



## 3 終わりに

この跳び箱運動の単元を振り返って, 子どもたちは「どうすれば技がもっと美しくなるかな?」ということ巡って試行錯誤し, 最後まで挑戦し続けていくことができたように感じている。これは, 『わたしたちの体育』に掲載されている技のポイントや学習の流れ, そして練習方法などが様々な面で子どもたちの学習の助けとなったことが理由だと感じている。これからも様々な形で, 『わたしたちの体育』を活用しながら, 授業実践に取り組んでいきたいと考えている。

## 「子どもが夢中になる」授業を目指して

「回転する動きのおもしろさを感じよう！」 5年 器械運動

『わたしたちの体育』 P.6～11

徳島県徳島市福島小学校 教諭 斉藤 貴則

### 1 はじめに

マット運動は、くるっと回ったり、逆さになったりすること等、動きのおもしろさを味わえる運動である。しかし、子どもたちにとってマット運動に夢中になれるかどうかは、マット運動の動きのおもしろさを味わうだけでなく、技が「できる」ことも大きく左右していることが多い。そこで、動きのおもしろさを十分に味わいながら、子どもたちが自然と技に挑戦できるようにしたいと考えた。



### 2 実践内容

(1) 単元名「回転する動きのおもしろさを感じよう！」『わたしたちの体育』 5年 P.6～11

(2) 単元目標

- 基本的な回転技や倒立技を安定して行うとともに、その発展技を行ったり、それらを繰り返したり組み合わせたりすることができるようにする。 **【技能】**
- マット運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができるようにする。 **【態度】**
- 自己の能力に適した課題の解決の仕方や技の組み合わせ方を工夫できるようにする。 **【思考・判断】**

(3) 単元計画（6時間）

時	学習活動	教師のはたらきかけと活動の様子
	オリエンテーション	
やってみる	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習のねらいや進め方を知る。</li> <li>○「やってみよう」をする。</li> <li>○教師が提示するやさしい動きや場でやってみる。</li> <li>○学習のまとめ方について知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○『わたしたちの体育』を使って、学習のねらいや進め方を説明する。</li> <li>○きまり、学習の場、安全面について理解させる。</li> <li>○「学習のあしあと」の使い方を説明する。</li> </ul>
やってみる・ひろげる	<p style="text-align: center;">活動① いろいろな技に挑戦しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「やってみる」で理解した動きや技をひろげ、アイデアを出し合って活動を工夫する。</li> <li>○自分ができるようになりたい動きや技に応じた場を選んで活動する。</li> <li>○感じたことや気付いたことを友達と共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ICTを活用し、自分の動きを振り返ることや、友達と動きを確かめ合うことで、思い描いた動きに近づけさせる。</li> </ul>



ふかめる	活動② 新しい技に取り組んだり、できる技を組み合わせたりしよう。
	<p>○仲間と一緒にできるようになりたい動きや技にこだわって活動する。</p> <p>・技を組み合わせたり、新しい技に挑戦したりする。</p> <p>・グループで技を見せることや、ミニ発表会を行う。</p>

#### (4) 授業の実際

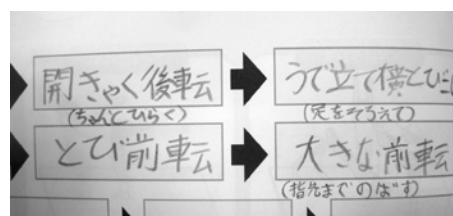
##### ① 動きのおもしろさを味わいながら運動の基礎感覚を身に付ける工夫

『わたしたちの体育』の「やってみよう」(P.6)に載っている動きを中心に、マット運動につながる動きを多く取り入れ、意欲づけをした。「手押し車」→「手押し車でじゃんけん」→「手押し車から前転がり」など、少し工夫を加えるとバリエーションが増え、子どもたちが夢中になって取り組むことができた。



##### ② 技の組み合わせの工夫

『わたしたちの体育』の「技を組み合わせよう」(P.10)に自分たちが挑戦する技を記入させた。その際、「自分たちで見つけたコツ」や「P.6～9に載っているコツ」を付け加えることで、自分たちの課題が明確となった上で組み合わせ技に取り組むことができた。



##### ③ 振り返りから動きのおもしろさをひろげるための工夫

授業の終わりには、『わたしたちの体育』の「学習のあしあと」(P.11)を記入させた。そこから子どもたちが次時に挑戦したい動きが何かを読み取り、場の設定に生かした。例えば「次はもっと大きな前転がしたい。」と書いている子どもが多いときには、P.8を参考に跳び箱(実際にはやわらかい箱)を使って大きなとび前転の感覚が味わえる場を設定した。子どもたちの意識によって、毎時間少しずつ場の設定を変化させた。



### 3 終わりに

子どもたちの『わたしたちの体育』への記入や活用の様子を見ることで、教師が子どもたちの意識を見取ることがよりできるようになった。その結果、子どもたちの意識に沿った学習に近づけたと言える。

今回実施したクラスでは、自分が知っている技にどんどん挑戦したいと思う子が多かった。そのため、『わたしたちの体育』に載っている技に挑戦する時間を多く設けた。もし、「もっと逆さの感覚を味わいたい」などの意見が多かったならば、また違った授業構成になっていたであろう。『わたしたちの体育』を活用することで、教師が考えた授業を予定通り行うのではなく、毎時間の子どもの意識が反映され、より生きた授業になると実感している。今後も『わたしたちの体育』を使って授業をしていくことが楽しみである。



# 『わたしたちの体育』を活用した「ハードル走」の実践

「ハードル走」 6年 陸上運動

『わたしたちの体育』 P.40～45

愛媛県西条市立玉津小学校 教諭 河野 寛昭

## 1 はじめに

高学年の陸上運動では、「短距離走・リレー」、「ハードル走」、「走り幅跳び」、「走り高跳び」を行う。「ハードル走」では、インターバルの距離やハードルの台数などのルールを定めて競走したり、自己の記録の伸びや目標とする記録への達成を目指したりしながら、ハードルをリズムカルに走り越えることができるようにすることをねらいとしている。

今回は、『わたしたちの体育』のイラストを活用しながら、子どもたちが意欲的に学び合い、運動の楽しさを実感できるような体育学習を目指し、実践を行った。

## 2 実践内容

(1) 単元名「ハードル走」『わたしたちの体育』 6年 P.40～45

(2) 単元目標

- ハードルをリズムカルに走り越えることができるようにする。 **【技能】**
- 運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。 **【態度】**
- 自己の能力に適した課題解決の仕方、競走や記録への挑戦の仕方を工夫することができるようにする。 **【思考・判断】**

(3) 単元計画（全6時間）

時	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ オリエンテーション</li> <li>・学習のねらいと進め方を知る。</li> <li>・用具等の使い方について知る。</li> </ul>
2	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">活動① リズムカルに走り越えて、ハードル走をしよう。</div>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 「やってみよう」を行い、ハードル走の基となる動きを身に付ける。</li> <li>② 『わたしたちの体育』を参考にして、調子よくハードルを乗り越えることができるようにする。</li> </ul>
4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">活動② 場を選んで友達と競走したり、記録をのばしたりしよう。</div>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 『わたしたちの体育』を参考に、場を工夫する。</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>② チームで競走をする。</li> </ul>

#### (4) 授業の実際

##### ① 導入「やってみよう」での活用

『わたしたちの体育』の「やってみよう」(P.41)の動きを参考にして導入に取り入れた。

拡大した図を掲示し、グループで話し合いの場を設けることで、児童は抜き足の形を意識したり、インターバルの歩数を考えたりしながら練習を行い、スムーズにハードル走へ移行することができた。

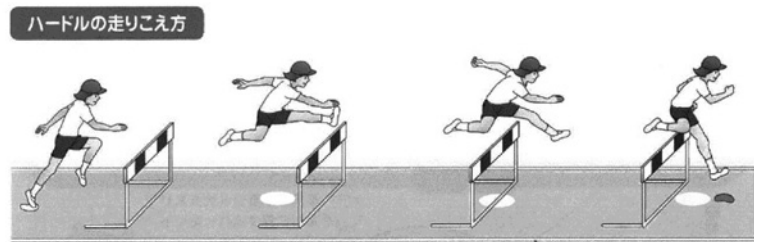


『わたしたちの体育』 6年 P.41

##### ② 活動①での活用

ハードルをリズムカルに走り越えることができるように『わたしたちの体育』(P.42)に掲載されている「走りこえ方」を活用した。

班で互いのフォームを確認させながら活動に取り組ませるため、本校で取り入れている「学び合い学習」の時間を設けた。「もっと足をまっすぐ前に。」や「足を下ろす位置をハードル近くにしたらいいよ。」といった動きを意識した具体的なアドバイスをとつなげることができた。



『わたしたちの体育』 6年 P.42

##### ③ 活動②での活用

活動の場を設定したり、記録会を行ったりする際に『わたしたちの体育』(P.43, 44)を活用した。

自己の能力に合わせて、無理なくリズムカルに走り越えることができるように、ハードル間のインターバルを設定したり、目標記録を目指して動きを工夫したりしながら、いろいろな競走に楽しみながら取り組んでいる様子が見られた。



### 3 終わりに

『わたしたちの体育』を活用したことで、児童は動きをイメージすることができ、主体的に学び合う活動へと結び付けることができた。特に、基礎となる動きづくりを単元の最初に行ったことが、よい動きづくりとなり、競走や記録会を楽しむ活動へとつなげることができた。今後も児童が主体的に学び合い、体育学習を楽しむことができるよう『わたしたちの体育』を活用していきたい。

# なりきって踊る楽しさを膨らませる体育学習を目指して

『なりきり生きものランド!!』 2年 表現リズム遊び

『わたしたちの体いく』 P.22～25

山口県山口市立仁保小学校 教諭 上田 雅純

## 1 はじめに

本単元は、子どもがいろいろな生き物の様子や特徴をとらえ、そのものになりきって全身の動きで表現する楽しさを感じることをねらいとする学習である。何かになりきることで、いつもとは違うものに変身する楽しさを味わうことができる。また、いろいろな友達と手をつないだり、一緒に踊ったりする活動を通して、お互いの体の温もり、動きの違いやよさなどを感じさせ、友達と一緒に運動する楽しさや喜び、共に学び合うよさも実感することができる。しかし、本学級の子どもは、授業前のアンケートから、恥ずかしさや経験不足から表現することに抵抗を感じている子どもがいることが分かった。

そこで、『わたしたちの体いく』にある「やってみよう」のほぐしの運動を行うことで、子どもの心と体を十分にほぐし、スムーズに表現遊びに入ることができるようにしていく。また、活動①②に掲載されている生き物や動きの例を参考にさせることで、楽しみながら動きに広がりや生まれるようにする。そして、「やってみよう」や活動①②の場面では、『表現運動CD』を使用することで、場の雰囲気を盛り上げ、子どもの想像力をかきたてたり、様々な動きを引き出したりすることに役立てたい。



『表現運動CD』

## 2 実践内容

(1) 単元名「なりきり生きものランド!!」 『わたしたちの体いく』 2年 P.22～25

(2) 単元目標

- 生き物の様子や特徴をとらえ、なりきって全身で踊ることができるようにする。 【技能】
- 表現遊びに進んで取り組み、きまりを守って友達と仲よく踊ることができるようにする。 【態度】
- 楽しく踊ることができる動きを選んだり、友達のよい動きを見つけたりすることができるようにする。 【思考・判断】

(3) 単元計画（全6時間）

	1	2・3	4・5	6
	オリエンテーション	虫ランドへ行こう!!	海ランドへ行こう!!	生きものランドパーティー!!
学 習 活 動	やってみよう			
	・野原や海の生き物の名前やイメージを出し合い、教師と一緒に踊る。	活動①		・お気に入りの生き物を選び、簡単なお話を作って踊る。
		活動②		
	振り返り			

(4) 『わたしたちの体いく』・『表現運動CD』の活用場面

① 「やってみよう」での活用

『わたしたちの体いく』 P.14, 22, 23 『表現運動CD』 CD : V-1, 2 I-13, 14

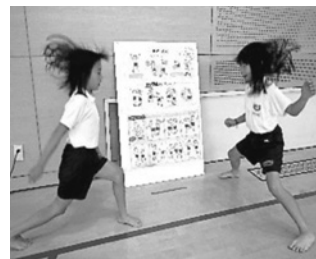
毎時間、授業の導入で「やってみよう」の「かがみあそび」や「足じゃんけん」, 「リズムあそび」をすることで、緊張感も取れ、笑顔で活動することができた。十分に心と体をほぐすと、スムーズに表現の世界へ入ることができることが分かった。また、『表現運動CD』を活用することで、雰囲気盛り上げることができた。ノリのよい曲が多く収められているので、リズム遊びでは、子どもたちがリズムに乗って、いきいきと踊ることができた。



「リズムあそび」



『わたしたちの体いく』 2年 P.22



「足じゃんけん」

② 活動①での活用 『わたしたちの体いく』 P.22, 23 『表現運動CD』 CD : I-10, 12

活動①では、教師と一緒にいろいろな生き物になりきって踊っていった。その際に、教師が『わたしたちの体いく』の子どもの吹き出しの言葉を参考にして、「高いー低い」、「速いー遅い」の動きを引き出す「高い空をとんでいるよ。」「えものに向かって、そっと近づくよ。」などの具体的な言葉かけをしていった。そして、全身を使ったり、顔までなりきったりしている子どもを紹介し、その動きを全員で一緒に踊って共有化していくことで、動きを高めていくことができた。

高い空をとんでいるよ。

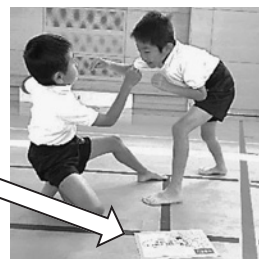


③ 活動②での活用 『わたしたちの体いく』 P.24, 25 『表現運動CD』 CD : I-10, 12

活動②では、ペアでいろいろな生き物になりきって踊っていった。その際に、『わたしたちの体いく』に掲載されている生き物をコピーした「生きものカルタ」(コピーしたものを色画用紙に貼る)を使用した。そのカルタを



『わたしたちの体いく』 2年 P.22



体育館の床にランダムに置き、ペアでめくりながら踊っていった。生き物の様子や吹き出しの言葉がヒントとなり、子どもたちは友達とかかわりながら夢中になって、「めくる→踊る」を繰り返し、楽しみながら動きに広がりが生まれていった。

### 3 終わりに

『わたしたちの体いく』は、表現リズム遊びの動きのヒントを与えたり、イメージをもたせたりするなどの点で指導の助けとなった。また、『表現運動CD』は、『わたしたちの体いく』の内容に合わせて作成されており、非常に使いやすく、子どもの気分を高めたり、イメージを膨らませたりすることに効果的であった。多くの先生方に、この二つを活用して表現運動の実践を行ってほしい。

# 第55回 中・四国小学校体育研究大会（香川大会） 平成29年度香川県小学校教育研究会体育部会研究発表会

## 1次案内

- 1 大会主題 **子どもと共に創る体育授業**  
－教師の意図的な指導による，子ども主体の授業づくり－
- 2 主催 中・四国小学校体育連盟 香川県小学校体育連盟 香川県小学校教育研究会  
共催 香川県教育委員会 丸亀市教育委員会
- 3 後援 スポーツ庁（予定）  
香川県小学校長会 丸亀市小学校長会 香川県学校体育会
- 4 主管 第55回中・四国小学校体育研究大会（香川大会）実行委員会  
香川県小学校教育研究会体育部会  
丸亀市立城乾小学校 丸亀市立城北小学校
- 5 期日 **平成29年10月27日（金）**
- 6 会場 **丸亀市立城乾小学校（公開授業会場）**  
〒763-0033 丸亀市中府町5丁目15番1号  
TEL 0877-22-8158 FAX 0877-22-8159  
  
**丸亀市立城北小学校（公開授業会場）**  
〒763-0002 丸亀市瓦町95番地  
TEL 0877-24-4700 FAX 0877-24-4701  
  
**丸亀市立城西小学校（全体会場）**  
〒763-0026 丸亀市六番丁12番地  
TEL 0877-22-9267 FAX 0877-22-9269
- 7 講師 全体指導  
中・四国小学校体育連盟 最高顧問  
筑波大学名誉教授 教育学博士 成田十次郎 先生  
講演  
国立教育政策研究所 教育課程研究センター  
研究開発部 教育課程調査官 高田 彬成 先生



## 8 日 程

8:00～ 8:30	8:30～ 8:45	9:00～ 9:45	10:00～ 10:45	10:55～ 11:55	11:55～ 12:50	12:50～ 14:20	14:35～ 16:30				
受 付	朝 の 活 動	公 開 授 業 Ⅰ	公 開 授 業 Ⅱ	分科会Ⅰ	昼 食	分科会Ⅱ			全体会		
				授 業 協 議		基 調 提 案	県 外 提 案	研 究 協 議	県 内 提 案	研 究 協 議	開 会 行 事
城乾小学校・城北小学校						城西小学校					

## 9 分科会

	分科会名	県外発表	県内発表
1	体づくり運動（体ほぐし）	高知県	香川県
2	器械・器具（低）	徳島県	
3	走・跳の運動	愛媛県	
4	ゲーム（低・中）	岡山県	
5	体づくり運動（多様な動き・体力）	広島県	
6	器械運動（中・高）	愛媛県	
7	陸上運動	鳥取県	
8	水 泳	徳島県	
9	ボール運動	山口県	
10	表現運動	高知県	
11	保 健	島根県	

## 10 提案授業（予定）

	城乾小学校	城北小学校
1年	表現遊び	走・跳の運動遊び
2年	ゲーム	器械・器具を使った運動遊び
3年	保 健	体ほぐしの運動
4年	保 健	走・跳の運動
5年	体づくり運動	保 健
6年	ボール運動	器械運動

## 各県研究主題と主な研究会・研修会（2016年度）

島根県	【研究主題】	動いて気づく できていかす しまねっ子 -動きを高め、運動の醍醐味を味わう体育学習-
	7月29日	第52回 島根県学校ダンス指導者研修会 実技研修 表現運動・ダンス（講師 宮本 乙女 日本女子体育大学運動科学科） 実技研修 フォークダンス（講師 永島 愛子 黒見ひとみ 島根県フォークダンス連盟公認指導者）
	8月4日	第27回 島根県小学校体育授業研修会 公開授業Ⅰ・公開授業Ⅱ・授業運動教材解説・中・四国小学校体育研究大会プレ発表会
愛媛県	【研究主題】	愛顔（えがお）いっぱい 体育学習
	8月4日	第40回 愛媛県小学校教員体育研修会 研究発表・研究実践紹介 実技研修「楽しさが広がる体づくり運動・表現運動の授業」（講師 木山 慶子 群馬大学教育学部保健体育講座准教授）
鳥取県	【研究主題】	勢いのある鳥取の体育 ～はずむ心 豊かな学び 確かな力～
	8月8日・9日	鳥取県小学校体育夏季一泊研修会 講演「表現運動の特性と授業づくり-その気にさせる・本気になれる授業-」 実技研修「表現運動の指導の在り方」（講師 村田 芳子 筑波大学名誉教授） 講義「鳥取県の小学校体育に望むこと」 中・四国小学校体育研究大会（鳥根大会）領域別分科会プレ発表
山口県	【研究主題】	「楽しい体育」から「もっと楽しい体育」へ ～「動き」と「学び」を確かに高める体育学習～
	8月10日	第9回 女性教員のための体育研修会 実技指導Ⅰ・実技指導Ⅱ・実技指導Ⅲ （講師 有田 敏広 紀村 修一 山口大学教育学部附属山口小学校教諭）
	8月17日	第12回 山口県小学校体育実技研修会 指導講話「体づくり運動の動きと学び」・実技指導（講師 白旗 和也 日本体育大学教授）
高知県	【研究主題】	運動好きな子どもを育てる体育学習 ～ユニバーサルデザインの視点から授業を作る～
	8月26日	第57回 高知県小学校体育連盟夏季共励会 中・四国小学校体育研究大会リハーサル及び研究協議 講義及び実技講習「スポーツリズムトレーニング」（講師 津田 幸保 美作大学准教授）
広島県	【研究主題】	「わかる・できる・かかわり合う」体育学習 ～指導と評価の一体化を通して～
	8月8日	第82回 広島県体育同好会夏季体育研修会 講演「今後の体育科の動向と授業の在り方」（講師 大井 一徳 広島県教育委員会 スポーツ振興課指導主事） 模擬授業・実技研修①・実技研修②
	8月10日	広島県学校教育研究会夏季体育実技研修会 模擬授業 講演「これからの小学校体育の考え方・進め方」（講師 白旗 和也 日本体育大学教授）
	9月23日	第40回 広島県小学校体育研究大会福山大会 授業公開Ⅰ・授業公開Ⅱ・研究協議・分科会・全体会 講演「主体的に学び、かかわり合う体育授業の創造」（講師 日野 克博 愛媛大学准教授）
徳島県	【研究主題】	身体がうごく・みんながうごく・心がうごく体育学習-すべての子どもが本気になる教材の開発-
	7月29日	第62回 徳島県小学校体育指導者講習会 講演（講師 白旗 和也 日本体育大学教授）・分科会・全体会
	11月17日	第58回 徳島県小学校体育科教育研究大会 公開授業・分科会・全体会 講演「体育の価値と授業づくり」（講師 白旗 和也 日本体育大学教授）
岡山県	【研究主題】	課題に向き合いながら、身につけた力を活用し続ける岡山っ子の育成
	8月22日・23日	岡山県小教研体育部会 岡山小学校体育連盟夏季研修会 講演「新しい学習指導要領を見据えたこれからの体育学習」（講師 高田 彬成 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官） 分科会別グループ協議・授業づくり
香川県	【研究主題】	子どもと共に創る体育授業 ～教師の意図的な指導による、子ども主体の授業づくり～
	7月27日	香川県小学校教育研究大会 体育部会夏季研修会 全体会・分科会Ⅰ・分科会Ⅱ・全体指導 講演「体育科で育成する資質・能力」（講師 高田 彬成 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官）

## 機関誌『中・四国の体育』のあゆみと担当県

1号…昭和47年 香川県（創刊号） （第10回研究発表大会記念）	23号…平成6年 山口県
2号…昭和48年 岡山県	24号…平成7年 鳥取県（40周年号）
3号…昭和49年 広島県	25号…平成8年 愛媛県
4号…昭和50年 高知県（20周年号） （体育連盟発足20周年記念）	26号…平成9年 島根県
5号…昭和51年 鳥取県	27号…平成10年 香川県
6号…昭和52年 山口県	28号…平成11年 岡山県
7号…昭和53年 島根県	29号…平成12年 徳島県
8号…昭和54年 愛媛県	30号…平成13年 広島県
9号…昭和55年 香川県	31号…平成14年 高知県
10号…昭和56年 岡山県	32号…平成15年 山口県
11号…昭和57年 徳島県	33号…平成16年 広島県
12号…昭和58年 広島県	34号…平成17年 高知県（50周年号）
13号…昭和59年 高知県	35号…平成18年 山口県
14号…昭和60年 山口県（30周年号）	36号…平成19年 鳥取県
15号…昭和61年 鳥取県	37号…平成20年 愛媛県
16号…昭和62年 愛媛県	38号…平成21年 島根県
17号…昭和63年 島根県	39号…平成22年 香川県
18号…平成元年 香川県	40号…平成23年 岡山県
19号…平成2年 岡山県	41号…平成24年 徳島県
20号…平成3年 徳島県	42号…平成25年 広島県
21号…平成4年 広島県	43号…平成26年 高知県
22号…平成5年 高知県	44号…平成27年 山口県（60周年号）
	45号…平成28年 鳥取県

### 編集後記

平成23年度からの学習指導要領完全実施に合わせて、中・四国小学校体育連盟によって改訂されました『わたしたちの体育』『表現運動CD』は、多くの学校で活用されています。指導内容の明確化や体系化、運動の取り上げ方の弾力化、全学年における「体づくり運動」の指導など、いくつかの改訂の要点をわたしたち教師が理解し、子どもの健やかな心と体を育てる体育科教育を充実させていく必要があります。

『中・四国の体育』第45号では、中・四国9県の現場の先生方の協力を得て編集している『わたしたちの体育』『表現運動CD』を活用した実践を掲載し、みなさんの日常の体育の授業で役立てていただきたいと考えました。是非、ご一読いただき、今後の体育科学習の充実にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、『中・四国の体育』第45号の発行に当たりまして、執筆をお願いした先生方、各県において取りまとめをしていただいた先生方、ご多用の中ご協力いただき、誠にありがとうございました。

中・四国の体育 第45号（平成28年度）

中・四国小学校体育連盟

発行／平成29年3月

印刷／牟禮印刷株式会社

**中・四国小学校体育連盟**

<http://www.chushikoku-syotairen.jp>